

那覇市文化財調査報告書第5集

# 那覇市の遺跡

——詳細分布調査報告書——

1982年3月

沖縄県那覇市教育委員会

## 発刊にあたって

今、ここに国・県の補助と指導をいただき市内遺跡分布調査報告ができましたことを、喜びとするところであります。

わが市に所在する埋蔵遺跡の動向は、大正12年に城嶽貝塚から明刀銭が出土し、1932年の崎樋川貝塚の発掘調査、1968年に山下町第一洞穴遺跡が発掘調査され約32,000年前の人骨が出土するなど重要な位置を示しています。また、1968年市史第一巻一において現沖縄国際大学教授の高宮廣衛氏による各遺跡の概要の紹介があり、これまでに、多和田真淳氏をはじめとする情熱深い究徒により35の遺跡が確認されており、そして今回の調査で新しく3ヶ所に遺跡、散布地が確認されました。

しかし、戦後の諸開発により、城嶽貝塚、天久貝塚、天久遺跡、石田遺跡、山川貝塚、ガジャンビラ丘陵遺跡等多くの遺跡が破壊され、遺跡の周知の徹底と保護活用が著しく遅れている現状であります。そこでこの調査を機会に周知は元よりのこと、市民が自主的に学習に利用できるよう、保護と活用の行政を積極的に押し進める所存であります。

最後に、この調査に御協力をいただいた文化庁、県、並びに調査員の方々に感謝申し上げます。

那覇市教育委員会

教育長 伊波 静 男

## 例 言

1. 本報告書は那覇市教育委員会が、総事業費2,000,000円（国補助80%、県補助10%、市負担10%）で、昭和56年度に実施した市内遺跡詳細分布調査の成果をまとめたものである。
2. 調査は、昭和56年6月11日から昭和57年3月10日まで実施した。

調査責任者 那覇市教育委員会  
教育長 伊波 静男

調査指導助言 沖縄県教育庁文化課  
専門員 上原 静氏

調査担当 那覇市教育委員会社会教育課  
主事 仲地 洋  
臨時職員 大田 宏好  
金城 寿久

3. 調査にあたり、次の方々に調査員を委嘱し、多くの教示を受けた。

考古学研究者 多和田真淳氏  
沖縄国際大学教授 高宮廣衛氏  
興南高等学校教諭 嵩元政秀氏  
大平高等学校教諭 宮城長信氏  
県立博物館学芸員 知念 勇氏

4. 市内城岳貝塚、崎樋川貝塚、山下町第Ⅰ洞穴遺跡出土遺物の写真撮影において次の方々に便宜を受けたので厚く感謝申し上げます。

元東京大学教授 鈴木 尚氏  
同 高井冬二氏  
東京大学考古学研究室、助教授 上野佳也氏  
同 大学古生物研究室、助教授 速水 格氏  
奈良国定文化財研究所々長 坪井清足氏  
京都大学考古学研究室、主任教官 樋口隆康氏  
同 助手 岡内三真氏

5. 本報告書に登載した埋蔵文化財包蔵地は38ヶ所である。これは昭和57年3月現在で、今後の調査によって更に増えることも考えられる。

6. 遺跡分布地図においては、遺跡の範囲を線で囲んであるが、これはあくまでも表面調査による範囲確認であり、実際の発掘調査あるいは雑木の伐採などによって範囲が変動する場合がある。
7. 本報告書に掲載してある2千5百分の1国土基本図は国土地理院発行の地図を複製したものである。(承認番号 昭57沖復 第15号)
8. 3万5千分の1地形図は那覇市建設部都市計画課の発行した那覇市全図を複製したものである。

## 目 次

第Ⅰ章 調査の概要 .....	1
第Ⅱ章 分布調査地域における自然・人文環境 .....	2
第Ⅲ章 那覇市における考古学研究史 .....	4
第Ⅳ章 那覇市における各遺跡の概要 .....	5
第Ⅴ章 関係文献目録 .....	56
第Ⅵ章 遺跡分布図 .....	63

## 第I章 調査の概要

本市において、沖繩戦後の都市化は著しく、その影響を受けた諸開発によって多くの遺跡が破壊され、先史時代のリンクが大きく欠けてしまった。しかし、多くの遺跡が消え去る過渡期に、調査、研究された高宮廣衛氏的那覇市の考古資料、那覇市史 1967 年、があり貴重な報告となっている。

今回の遺跡詳細分布調査は、今後は開発事業に対して事前に遺跡の所在、範囲、性格等を明確にするのと、積極的に保存し活用を図るという目的で実施した。

調査は市内の遺跡に詳しい、多和田真淳氏、高宮廣衛氏、高元政秀氏、宮城長信氏、知念勇氏を調査員に委嘱し、現場で遺跡の分布、性格と発見及び破壊前の状況を教示して戴き、後日専従調査員が表面踏査を主体とする分布調査を実施した。遺跡の位置と範囲をくまなく地図にプロットすると共に、遺跡の立地、現状、時期、出土品等を「遺跡詳細分布調査カード」に記録した。調査中に建設工事で遺物包含層の断面が露頭したガジャンピラ丘陵遺跡、崎橋川貝塚においては断面の実測を行った。特に崎橋川貝塚においては、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室長、沢田正昭氏の指導を受け断面を削ぎとり記録保存した。

また、この調査を機会に、東京大学考古学研究室保管の城岳貝塚出土の明刀銭、同大学古生物研究室保管の山下町第一洞穴遺跡出土の化石鹿骨、京都大学文学部考古学研究室保管の崎橋川貝塚出土の遺物の写真撮影を行い貴重な写真資料を得ることができたので、本報告書に収録した。

## 第Ⅱ章 分布調査地域における自然・人文環境

### 1. 分布調査地域における自然環境

那覇市は、沖縄本島南部に位置する県都である。市は北側で浦添市、東側で西原町、東南側で南風原町、南側で豊見城村に隣接し、西側は東支那海に面し、慶良間諸島が眺望できる。

市域は東西が約10.3km、南北が約7.8kmで、総面積は37.47km<sup>2</sup>である。

地勢は市の東部にあたる首里を中心に、繁多川、識名、真地にかけた一帯ではやや起伏の激しい丘陵が南北に延びている。市の北部の末吉、天久や南部の小禄地区もなだらかな丘陵になって、台地を形成している。市の中心部はおおむね平坦地（標高2～10m前後）である。首里の高台などに源をもつ河川が市域を横切り東支那海に注いでいる。市の北部の浦添市境を流れているのが安謝川、南部の豊見城村境を流れているのが国場川、市の中心部を縦横に流れているのが安里川、久茂地川、ガープ川などである。

地質は大別して第三紀中新世から第四紀洪積世にかけての琉球石灰岩及び沖積世の隆起珊瑚礁からなっているが、旧市内においては海浜堆積物からなるところもある。その分布状況は、旧市街地及び首里から天久・安謝にかけた一帯や識名あたりで琉球石灰岩が露出し、その他の地域では地表面は島尻層からなっている。

気候は亜熱帯モンスーン地帯に属し、四季を通じて平均気温22.2度、平均湿度が77%である。雨量は春から夏にかけて比較的に多く、夏から秋にかけて台風が来襲する。

### 2. 分布調査地域における人文環境

本市は県都として、政治、経済、文化、教育、交通運輸などあらゆる分野において、中心地である。市域の総面積37.47km<sup>2</sup>（県総面積の1.7%）の中に県人口の約27%に当たる295,813人の人口を擁し、県庁や国の出先機関などが所在し、経済活動においても各民間会社の本社や沖縄営業所などが集中し、県経済を支える重要な役割りを担っている。また、文化、教育の面においても、大学や研究機関をはじめ各種の文化施設などがあって、県都として総合的な機能をそなえている。

産業別人口は、第一次産業（農林水産業）は1,745人と少なく、第二次産業（建設業、製造業）が21,667人で、第三次産業（卸売業、小売業、サービス業、運輸通信業、公務、金融、保険業など）は85,646人と圧倒的に多い。

農家戸数は、昭和54年12月現在706戸で、耕地面積は23,504アールである。農耕地は都市

近郊の農地へのスプロール現象で、宅地への転用が進み、年々減少の一途をたどっている。わずかに残った農家は、キビ作から都市向けの野菜栽培に移行し、最近では花卉園芸もさかんになっている。

#### 参考資料

那覇市企画部広報課 「市勢要覧」 1981年



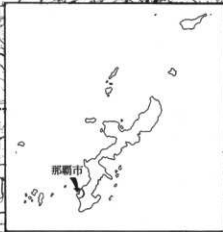
### 第Ⅲ章 那覇市における考古学研究史

年	代	那覇市における遺跡の発見、発掘調査について
1901年	明治34年	加藤三吾 天久村の「オガン」、首里金城村大阿母洞窟採集の石斧についての報告
1904年	明治37年	鳥居龍藏 城嶽貝塚の発見
1923年	大正12年	樺山資隆 城嶽貝塚で明刀銭を発掘
1924年	大正13年	伊東忠太・鎌倉芳太郎 首里城跡京ノ内北側下の発掘調査
1926年	大正15年	西村真次 城嶽貝塚の発掘調査
"	"	小牧実繁 "
1929年	昭和4年	金岡丈夫 城嶽貝塚の試掘調査
1932年	昭和7年	国吉真哲・浦崎康華 崎橋川貝塚の発見
1932年	昭和7年	島田真彦 崎橋川貝塚の発掘調査
1936年	昭和11年	伊東忠太・鎌倉芳太郎 首里城跡西ノアザナ、京ノ内、正殿前の発掘調査
1956年	昭和31年	多和田真淳 識名貝塚、シーマ御嶽遺跡の発見
1959年	昭和34年	" ガジャンピラ貝塚の発見
1960年	昭和35年	" 嵩下原貝塚、魚下祝部遺跡、首里西森遺跡の発見
1960年	昭和35年	大川清 崎山御嶽、首里城跡、鳥堀古瓦窯跡、観音堂下付近瓦窯跡、宝口周辺等の調査
1962年	昭和37年	文化財保護委員会 山下町第Ⅰ洞穴の発掘調査
1965年	昭和40年	高宮廣衛 末吉町A・B地点の発掘調査
1966年	昭和41年	" 崎橋川貝塚B、天久遺跡の発掘調査
1967年	昭和42年	" 波上洞埋葬遺跡の発掘調査
1967年	昭和42年	多和田真淳 山川貝塚の発見
1968年	昭和43年	沖縄洪積世人類遺跡調査団 山下町第Ⅰ洞穴の発掘調査
1970年	昭和45年	沖縄洪積世人類遺跡調査団 嵩下原第Ⅰ洞穴、識名原遺跡の発掘調査

## 第IV章 那覇市における各遺跡の概要

- |    |           |    |                   |
|----|-----------|----|-------------------|
| 1  | ギリチ原貝塚    | 21 | 識名原遺跡(A)          |
| 2  | 崎礎川貝塚     | 22 | 識名原遺跡(B)          |
| 3  | 天久グスク     | 23 | 魚下原遺跡             |
| 4  | 天久遺跡      | 24 | 魚下原第1洞穴           |
| 5  | 天久貝塚      | 25 | 石田遺跡              |
| 6  | 末吉町鹿化石出土地 | 26 | 石田グスク             |
| 7  | 首里西森遺物散布地 | 27 | 石田古墓遺跡            |
| 8  | 山川貝塚      | 28 | 壺川貝塚              |
| 9  | 虎頭山石器出土地  | 29 | 城岳貝塚              |
| 10 | 鳥堀古瓦窯跡    | 30 | 波上洞穴遺跡            |
| 11 | 首里城跡      | 31 | 三重グスク             |
| 12 | 崎山遺跡      | 32 | 屋良座森グスク           |
| 13 | 崎山御嶽遺跡    | 33 | 御物グスク             |
| 14 | 玉陵南側洞穴遺跡  | 34 | ガジャンピラ丘陵遺跡(洞穴も含む) |
| 15 | 嵩下原貝塚     | 35 | 住吉遺物散布地(洞穴も含む)    |
| 16 | 嵩下原第1洞穴   | 36 | 山下町第1洞穴遺跡         |
| 17 | 識名園内遺跡    | 37 | トゥムイ古墓遺跡          |
| 18 | シーマ御嶽遺跡   | 38 | カニマン御嶽遺物散布地       |
| 19 | 識名貝塚      |    |                   |
| 20 | 識名原遺跡     |    |                   |

# 那覇市内遺跡分布図



1 : 35,000  
0 200 400 600 800 1,000 2,000

## 1. ギリチ原貝塚

所在地 宇天久

安謝の市外バス停より西方約250mの地点にある琉球石灰岩台地西端部に立地する沖縄貝塚時代後期の遺跡である。ここは、1734年に平敷屋朝敏が処刑された場所とも周知されている。また、最近付近を開洋塔と呼び拝所になっている。遺跡の北側は標高約15mの琉球石灰岩が露頭し、南側は標高約9mで傾斜面となっている。遺物はこの傾斜面から後期土器、貝殻が僅かに採集できた。



ギリチ原貝塚 遠景（南側より）



ギリチ原貝塚 近景（南側より）

## 2. 崎樋川貝塚

所在地 字天久

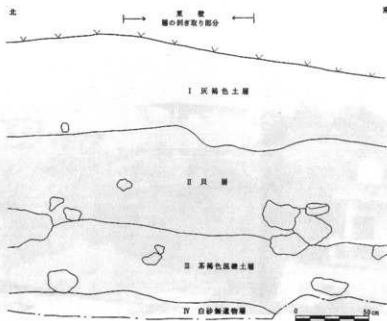
発見 A(前期) 1932年 国吉真哲・浦崎康華

泊港の北方から安謝にかけて南北に延びる琉球石灰岩を基盤とする丘陵がある。本貝塚はこの丘陵の北端西側の崖下及びその西側斜面に立地し、標高は約4～16mである。遺跡の範囲は南北約90m、東西約20mにおよぶ。

沖縄貝塚時代前期と後期の複合遺跡で、崖の直下は前期の貝塚で崎樋川貝塚A、その西側斜面は後期の貝塚で崎樋川貝塚Bと呼んでいる。前期の貝塚は1932年(昭和7年)に島田貞彦氏によって発掘調査が行われ、同年「琉球崎樋川貝塚」として報告されている(註1)。後期の貝塚は1966年(昭和41年)に高宮廣衛氏によって試掘調査が行われている(註2)。他に三宅宗悦氏の「琉球崎樋川貝塚出土の家犬に就て」の報告がある(註3)。

遺物は伊波式土器、莪堂式土器、大山式土器、後期土器(無文の口縁部・胴部、くびれ平底、乳房状尖底)、石斧、磨石、貝製品が採集できた。

果指定の史跡であるので保存状態は良好であるが、指定範囲外の区域は火葬場や畜産会社の施設建設のため破壊をうけている。火葬場裏側の破壊をうけた部分に幅約10m、高さ約2mの遺物包含層が露頭している。この包含層断面の一部を剥ぎ取り、那覇市教育委員会に保管している。



崎樋川貝塚側壁図



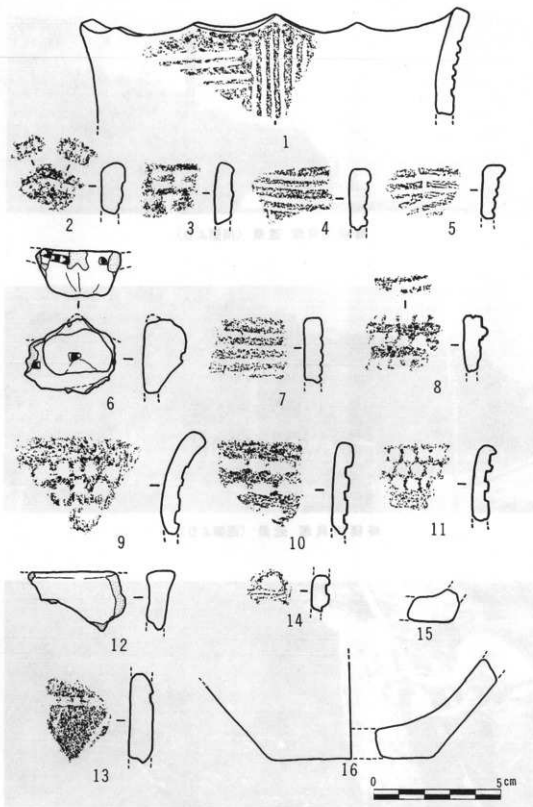
崎樋川貝塚 遠景（南側より）



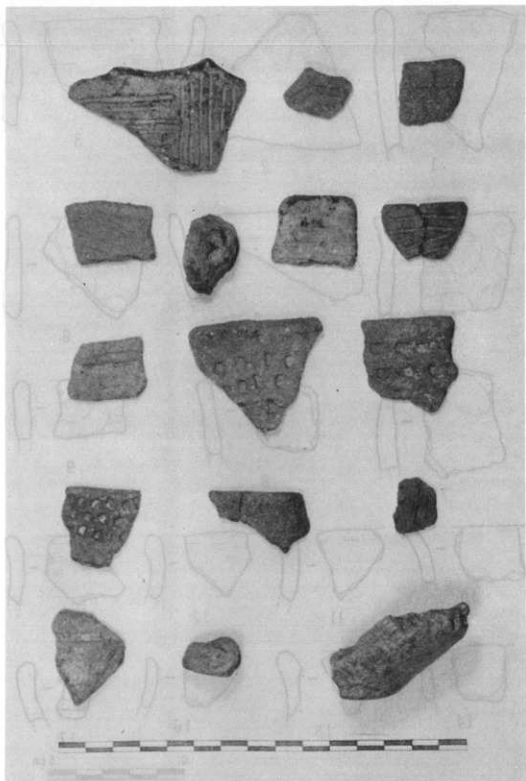
崎樋川貝塚 近景（西側より）



（作業）土層の剥ぎとり作業 藤野崎樋川貝塚

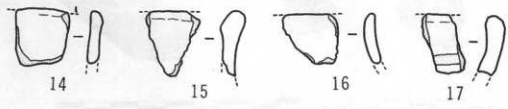
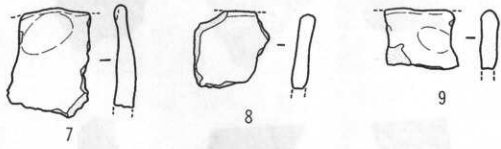
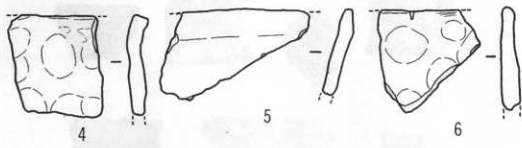
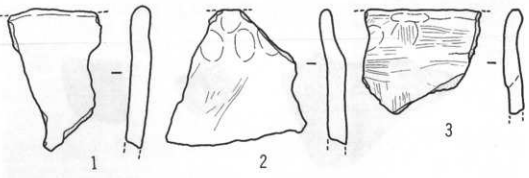


崎樋川貝塚採集 前期土器（口縁部、有文胴部、底部）

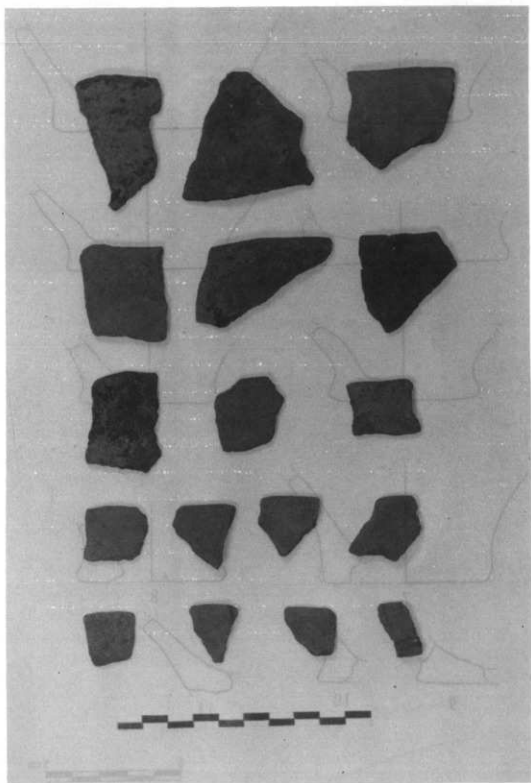


崎桶川貝塚採集 前期土器（口縁部、有文胴部、底部）

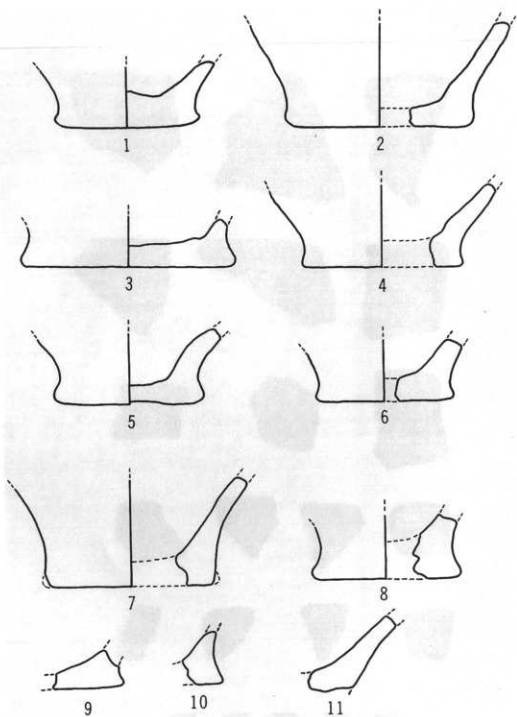




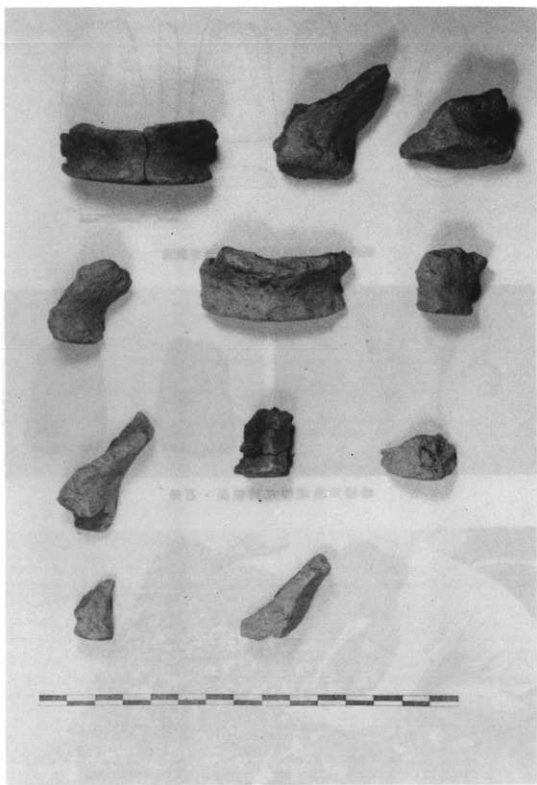
崎桶川貝塚採集 後期土器 (口縁部)



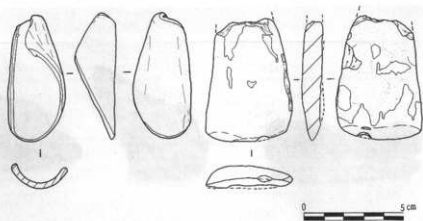
崎樋川貝塚採集 後期土器（口縁部）



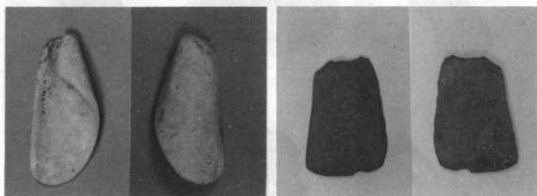
崎樋川貝塚採集 後期土器 (底部)



崎桶川貝塚採集 後期土器 (底部)



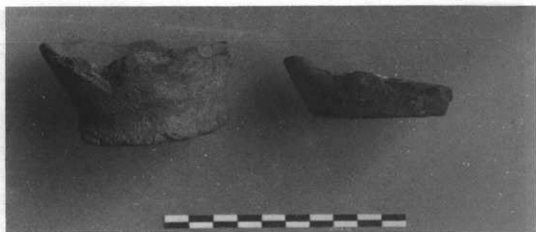
崎樋川貝塚採集員製品・石斧実測図



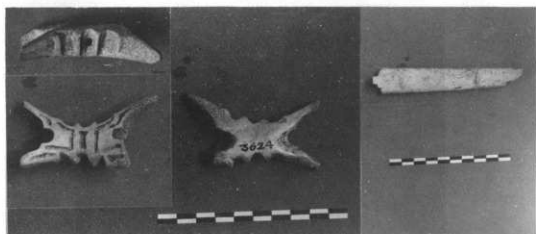
崎樋川貝塚採集員製品・石斧



断面標本作成 転写面の水洗い



崎樋川貝塚出土土器（底部） 京都大学考古学研究室蔵



■ 崎樋川貝塚出土骨製品 京都大学考古学研究室蔵



崎樋川貝塚出土 貝製品 京都大学考古学研究室蔵



崎樋川貝塚出土 貝製品 京都大学考古学研究室蔵



崎樋川貝塚出土石斧(表) 京都大学考古学研究室蔵



崎樋川貝塚出土石斧(裏) 京都大学考古学研究室蔵

### 3. 天久グスク

福岡県天久市

所在地 宇天久

天久丘陵のほぼ中央部西端に立地する。ここは天久丘陵で最も高い場所で、標高は約47mである。グスクの南側には天久遺跡が隣接する。石垣は築かれてなく、聖域的性格をもつグスクで、グスク内にはコンクリートでつくられた御嶽や香炉があり、拝所として利用されている。

採石工事により破壊をうけ、表土も削られ、基盤の琉球石灰岩が露頭している。そのためグスク内での遺物の採集は不可能で、天久遺跡へ降りる傾斜面で青磁、グスク系土器などが僅かに採集できるが、ほとんど小破片である。



天久グスク・天久遺跡・天久貝塚 遠景（西側より）



天久グスク 近景（南側より）



#### 4. 天久遺跡

所在地 字天久

発見 1966年2月 金武正紀

天久グスクの南側約40m、標高約38mの丘陵上に立地する沖縄貝塚時代中期の遺跡である。採石工事のため遺跡の大半が破壊をうけ、さらに遺跡に隣接する医院の拡張工事により壊滅状態になっている。現在では遺物がわずかに採集できるのみである。1966年に高宮廣衛氏によって発掘調査が行われ、中期土器、石器が出土している(註4)。



天久遺跡 近景 (南側より)

#### 5. 天久貝塚

所在地 字天久

天久遺跡の立地する丘陵の西側崖下に形成された沖縄貝塚時代前期の貝塚で、標高は約30mである。1977年の沖縄県教育委員会発行「沖縄県の遺跡分布」によると前期土器、貝製品、骨製品が出土したとあるが、現在は採石、宅地造成により壊滅状態で、遺物の採集はできなかった。

## 6. 末吉町鹿化石出土地

所在地 首里末吉町一丁目

発見 B地点 1964年 当真嗣一 安里嗣淳

末吉丘陵東南縁の琉球石灰岩の地隙に形成されていた旧石器時代の遺跡で、北側をA地点、その南側をB地点と呼んでいる。

1965年に高宮廣衛氏によって発掘調査が行なわれ、A地点からは骨角製品、鹿骨、鯨の歯、B地点からは鹿骨、鯨の歯などが出土している（註5）。遺跡の大半は宅地造成のための採石工事によって壊滅した。



末吉町鹿化石出土地 遠景（南東側より）



A地点 近景（南側より）

## 7. 首里西森遺物散布地

所在地 首里儀保町四丁目

首里儀保町の後方をほぼ東西に延びる琉球石灰岩丘陵がある。この丘陵のやや西端部近くを切り通して県道5号線が走っている。この切り通しの西側は西森とよばれ、北縁中央部には拝所がある。この拝所より約20m西側の岩の周辺がA地点、拝所の東側一帯がB地点、切り通しによってできた断崖面付近がC地点である。A地点からは沖縄貝塚時代前期の土器、グスク系土器等、B地点から磁器、グスク系土器、C地点からは鹿骨が得られている(註6)。今回の調査ではB地点からグスク系土器を採集したのみで、A地点からは遺物の採集はできなかった。C地点はすでに壊滅していた。



首里西森遺物散布地 近景(南側より)



(昔の遺跡) 遺跡 近景(西側より)

## 8. 山川貝塚

所在地 首里山川町1丁目

発見 1967年 多和田真淳

首里山川町一丁目と大中町二丁目の境をほぼ東西に延びる標高約80～90mの石灰岩小丘陵がある。この丘陵の西端付近、山川町一丁目22旧池城殿内の真側急斜面から沖縄貝塚時代中期の土器、貝殻が僅かに採集できた。中期の遺跡はゆるやかな斜面や丘陵上に形成されていることから山川貝塚も丘陵上に形成されていたと考えられる。丘陵上は宅地となっているので、遺跡は宅地造成の際に破壊されたと思われる。なお、この丘陵の中央部に第一尚氏の墓陵と伝えられている天山とイジンチジがある。



山川貝塚遠景



山川貝塚近景

## 9. 虎頭山石器出土地

鳥堀から儀保に延びる石灰岩丘陵を虎頭山と呼んでいる。赤平町2丁目7番地、城間富睦氏宅前の排水路に当るヶ所から元宮林署の排水路の新設作業で偶然的に石斧が1個出土した。



虎頭山石器出土地 遠景

## 10. 鳥堀古瓦窯跡

首里鳥堀の東、弁ヶ嶽に向う右側の斜面の民家（鳥堀町5丁目14番地、久高友光氏宅）の庭先に所在する。300年前に作成されたといわれている首里古地図に瓦壇として4基の窯口が記されておるが、現在は民家が立込み1基分相当の跡地が確認できる。付近一帯に瓦の破片や焼き土が散布している。立地しているこの土盛りをピンヌモーグラーと俗称している。



鳥堀古瓦窯跡 近景

## 11. 首里城跡

所在地 首里当蔵町一丁目

首里城は首里当蔵の標高約130mの石灰岩丘陵最頂部に立地し、廃藩まで琉球藩王の居城であった。城域は、東西約400m、南北約270mで規模の大きな城である。築城年代は不明であるが、察度王統の頃と考えられている。城内からは陶磁器、古瓦、古銭等が多く出土しているが、戦後、琉球大学の建設工事によって遺物包含層は攪乱をうけている。

城内には正殿、北殿、南殿、世訪殿、世添殿などの建物や歓会門、瑞泉門、白銀門、美福門、継世門、淑順門、右掖門、久慶門、漏刻門などがあり、城外には守礼門、中山門、園比屋武御嶽があった。これらは第二次大戦で破壊されたが、守礼門、園比屋武御嶽、歓会門と復元された。昭和57年3月末には琉球大学の移転が完了し、首里城の発掘調査と復元が計画されている。



首里城跡 遠景



首里城跡 近景

## 12. 崎山遺跡

所在地 首里崎山町一丁目

首里城跡の南側に北西から南東に延びる標高約120mの琉球石灰岩小丘陵がある。この丘陵の東側に雨乞御嶽、西側に崎山御嶽が立地し、遺跡は崎山御嶽の境内の西側断面に形成された旧石器時代の遺跡である。採石工事によって著しく破壊されており、遺物の採集は困難である。



崎山遺跡・崎山御嶽遺跡 遠景（北側より）



崎山遺跡 近景（北西側より）

\*\*\*\*\*  
13. 崎山御嶽遺跡

所在地 首里崎山町一丁目

崎山遺跡の東側、標高118mの石灰岩丘陵上に立地する。この場所は察度王の子息崎山<sup>\*\*\*\*</sup>子の屋敷跡だといわれている。遺跡の東側には崎山樋川がある。

1960年に大川清氏によって調査が行なわれ、「琉球古瓦調査抄報」として報告されている(註8)。鍍瓦、宇瓦、男瓦、女瓦、S字系瓦などの古瓦が豊富に出土している。

遺跡の立地する場所は現在崎山公園として整備され、そのため一部が破壊を受けている。



崎山御嶽遺跡



#### 14. 玉陵南側洞穴遺跡

所在地 首里金城町一丁目

発見 1982年 那覇市教育委員会

玉陵の南縁は高さ約3～4mの断崖となっている。本遺跡はこの断崖下に形成された洞穴内にある。洞穴は南に開口し、入口の幅約3.5m、高さ約1.5m、奥行き約9mで、奥の方は広く幅約4.9m、高さ約2.1mである。この洞穴の奥からグスク系土器が採集できた。この崖面の西側に古墓が2～3基あり、その一つから鳩目銭とガン首が採集できた。



玉陵南側洞穴遺跡 遠景



玉陵南側洞穴遺跡 近景

## 15. 嵩下原貝塚

所在地 宇真地

発見 1960年 多和田真淳

沖縄県農業試験場の西側約230m、識名台地の東端の琉球石灰岩崖下、標高約80mに立地する沖縄貝塚時代前期の遺跡である。崖の直下はほぼ平坦で、そこから東側にゆるやかに傾斜し、下方には金城川が流れている。崖面には第2次大戦中に構築された塹壕があり、そのために破壊をうけている。貝塚の範囲はこの塹壕付近に限られ、入口に貝層が僅かに残っている。前期土器、貝殻、カニのハサミ、石材が採集できた。

本貝塚より南西側、崖沿い約70mに嵩下原第I洞穴がある。



嵩下原貝塚遠景



嵩下原貝塚近景

## 16. 嵩下原第Ⅰ洞穴

所在地 字真地

発見 1967年4月 安里進

沖縄県ミバエ対策事業所後方、識名台地東縁の琉球石灰岩断崖面に形成された洞穴遺跡で、標高は約80mである。洞穴の入口は東に面し、幅約5.5m、奥行き約6m、床面から天井までの高さは約4mで、奥に行くに従って低くなる。洞穴は墓として使用されていたため、壁面に添って人骨や骨壺の破片が散乱している。

今回の調査では遺物は採集できなかったが、かつて鹿化石骨、鮫の歯、カニのハサミ等他、鹿骨製又伏骨製品が得られている(註9)。

現在、洞穴の入口前面は墓地造成のためけずりとられ、高さ約2.5m程の断面となっている。

なお、洞穴の南西側約10mの地点から前期土器と貝殻がわずかながら採集できたが、ここはすでに墓地造成のため壊滅していた。



嵩下原第Ⅰ洞穴 遠景 (南側より)



嵩下原第Ⅰ洞穴 近景

シキフ エンテイ  
17. 識名園内遺跡

所在地 字真地

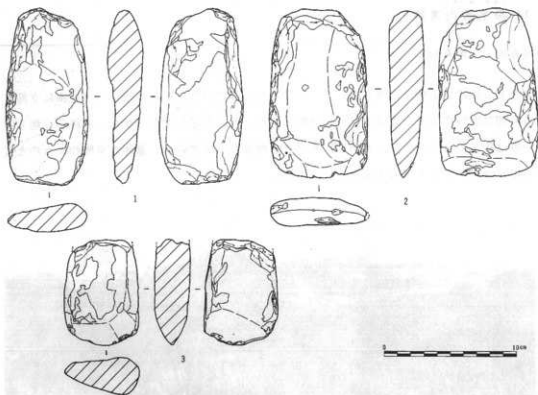
識名台地の東南端部に識名園がある。この識名園の西側、標高約82mの平坦部に立地する沖縄貝塚時代中期の遺跡である。遺物は中期土器、石器が採集できた。遺跡の立地する一帯は樹木の栽培を行っており、そのため攪乱を受けている。遺跡の東側約60mのところにシマチスジノリで有名な育徳泉がある。



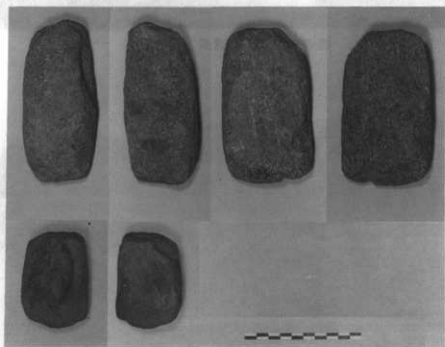
識名園内遺跡 遠景（南側より）



識名園内遺跡 近景（南西側より）



畿名園内遺跡採集 石斧実測図



畿名園内遺跡採集石斧

## 18. シーマ御嶽遺跡

所在地 字真地、識名

発見 1956年 多和田真淳

遺跡は字真地の西側の識名霊園のほぼ中央、標高約87mの小丘上に立地する。墓地造成のため著しく破壊をうけ、また、遺跡を2分するように道路（市道繁多川・識名線）が走っている。この道路に面してコンクリート造りのシーマ御嶽がある。

遺跡の範囲は広いが、遺物の散布は少ない。須恵器、グスク系土器、陶質土器、磨石が採集できた。



シーマ御嶽遺跡 遠景（南側より）



シーマ御嶽遺跡 近景（西側より）

19. 識名貝塚

所在地 字識名

発見 1956年 多和田真淳

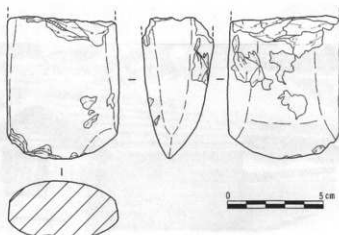
識名台地西南端の台地上に立地する沖縄貝塚時代中期の遺跡で、標高は約86mである。本貝塚の東側には識名原遺跡が隣接している。発見当時すでに痕跡もないまでに破壊されており（註10）、現在では宅地、道路になっている。台地上からは遺物の採集はできないが、西側急斜面から土器、石斧、貝殻などが若干採集できた。



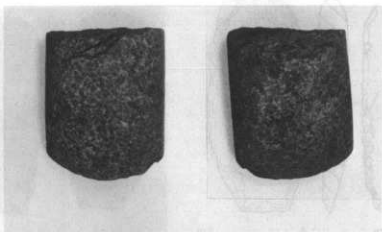
（識名貝塚近景（東側より））



（識名貝塚近景（南側より））



識名貝塚採集 石斧実測図



識名貝塚採集 石斧

20. 識名原遺跡

所在地 字識名・上間

字識名を東西に分離するように市道寄宮・真地線がほぼ南北に走っている。遺跡はこの市道より東側の字識名から字上間にかけて形成されている。ここは識名台地の西南端頂部に位置し、識名から上間にかけてゆるやかに傾斜しており、標高は約76～94mである。遺跡の範囲は広く、東は識名の東端傾斜面付近、西は識名貝塚付近、南は上間の一部、北は後ヌ御嶽付近におよぶ。遺物は青磁、グスク系土器、須恵器、陶質土器、石斧、磨石、凹石などの他に近世の陶器も得られた。遺跡全体が集落内にあり、宅地か耕地になっているため破壊をうけている。

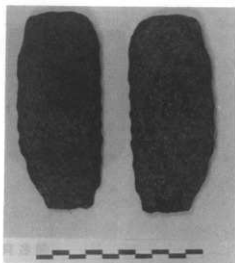




識名原遺跡 遠景（南側より）



識名原遺跡採集石斧実測図



識名原遺跡採集石斧

21. 識名原遺跡(A)

所在地 字識名

発見 1963年 多和田真淳

この遺跡は識名台地の南西に位置する上間集落のほぼ中央の高さ約2～4mの琉球石灰岩に形成された洞穴遺跡であったが、採石によって著しく破壊をうけ、その後の住宅建設のため完全に破壊されてしまった。かつて、鹿化石骨、鹿骨製又杖骨製品が採集されている（註11）。



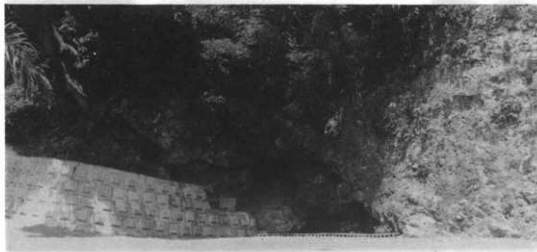
識名原遺跡 A・B 遠景

## 22. 識名原遺跡 ②

所在地 宇識名

遺跡は識名原遺跡(A)の東方約60mの地点にあって標高は約86mである。遺跡の立地する場所はおもともと石灰岩丘陵の斜面であったようであるが、A地点と同じく採石によって破壊をうけ、高さ約4mの断面となっている。断面下には幅約45m、奥行き約17mの岩陰がある。かつてその前面を埋めていた泥土礫層から鹿角骨が採集されている(註12)が、現在はアスファルトで舗装されており、遺物は採集できない。

識名原遺跡に隣接しているため、遺跡の周辺からは識名原遺跡の遺物(グスク系土器、磁器、石器など)が得られる。



識名原遺跡 B 近景

イヌマキノミ  
23. 魚下原遺跡

所在地 字繁多川

発見 1960年 多和田真淳

識名台地北縁の標高約82mの台地上に形成されたグスク時代の遺跡である。遺跡の範囲は南北約35m、東西約250mと広いが、遺物の散布は少ない。青磁、グスク系土器、陶質土器が採集できた。遺跡の立地する一帯は墓地となっているため破壊が著しい。

なお、発見者の多和田真淳氏は魚下祝部遺跡と命名されている(註13)。



魚下原遺跡(丘陵上)、魚下原第I洞穴遺景(北側より)



魚下原遺跡 近景(南側より)

## 24. 魚下原 第Ⅰ洞穴

所在地 宇繁多川

識名台地の北縁部は高さ約4～5mの断崖になっている。遺跡はこの断崖面の洞穴に形成されている。洞穴は北に開口し、高さ約1m、幅約2m、奥行き約1mの小洞穴である。旧石器時代の遺跡で、鹿骨が採集されている（註14）。洞穴の約3.5m直下には第2次大戦時に構築された防空壕がある。

第Ⅰ洞穴から東側約20mの地点に第Ⅱ洞穴がある。洞内から遺物は採集できなかったが、入口東側からは崖上（魚下原遺跡）から流れ込んだ遺物が採集できた。



魚下原第Ⅰ洞穴 近景

イレダ  
25. 石田遺跡

所在地 宇繁多川

発見 1964年

識名霊園の北側は傾斜面となっており、この傾斜面下方には石田中学校がある。遺跡は同校の運動場西南部に所在していたが、遺跡が確認されたのがグラウンド造成工事中であったために工事終了とともに壊滅してしまった。工事中に石斧、凹石、磨石、叩石、グスク系土器が出土している（註15）。

なお、1977年3月 沖縄県教育委員会発行の「沖縄県の遺跡分布」では石田グスク及石器出土地となっているが、両者は別の遺跡で石器出土地が石田遺跡である。



石田遺跡 遠景（東側より）



石田遺跡 近景（北側より）

## 26. 石田グスク

所在地 字繁多川

石田遺跡の西方約 130 m の地点、標高約 70 m の小丘上に立地していたが、宅地造成などによって壊滅してしまった。西側に識名小学校が隣接し、その北側の道路端に碑文が建てられている。現在では遺物の採集は不可能である。北側約 100 m のところに石田ガがある。



石田グスク 近景（西側より）

## 27. 石田古墓遺跡

所在地 字繁多川

石田グスク付近に所在していたが、宅地造成などによって破壊されてしまったようである。現在では、その場所さえも確認できない。天野鉄夫氏によって古墓内から石斧が採集されている（註16）。

28. 壺川貝塚

所在地 宇壺川

発見 多和田真淳・嵩元政秀

古波蔵から壺川に向かう国道329号線の右手に南東から北西に延びる琉球石灰岩丘陵がある。本貝塚は丘陵の西端近く、標高約26mの南側斜面に孤立する石灰岩の周辺に形成された神縄貝塚時代前期の遺跡である。石灰岩から西側の畑地に貝殻が散布し、また、貝層も確認できたが、人工遺物は土器の小破片が僅かに採集できたのみである。

石灰岩から東側は高さ約3～4mの崖になり、遺跡の立地に適しているが、墓地となっているので確認できなかった。また、崖上からは陶質土器が僅かに採集できた。



壺川貝塚 遠景（南西側より）



壺川貝塚 近景（西側より）

## 29. 城岳貝塚

所在地 楚辺一丁目

発見 1904年 鳥居龍藏

那覇高等学校より南側約150mに位置する標高約32mの琉球石灰岩小丘陵頂部に形成された沖縄貝塚時代前期の貝塚である。採石工事や遊園地造成のため壊滅状態で基盤の石灰岩が露出している。遺物の採集は困難である。この遺跡は大正12年に明刀銭が出土したことで著名である。

1927年(昭和2年)に小牧実繁氏によって発掘調査が行われ、前期土器、石器、貝製品、骨器、貝殻、獣魚骨が出土している(註17)。特に小牧氏の発掘や他の人々によって石鏃が多数得られていることが注目される。この他に人骨も出土しており、金関丈夫氏の報告(註18)がある。

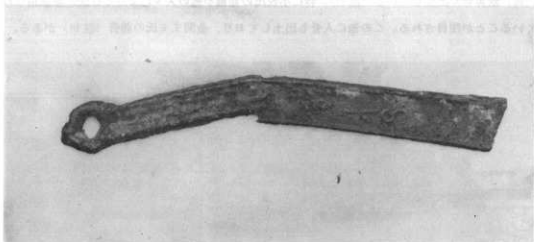
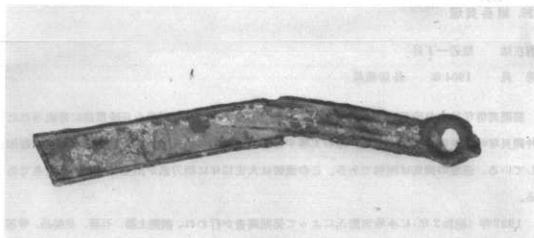


城岳貝塚 (西側より)



城岳貝塚 (南側より)





城岳貝塚出土明刀鏡（上…表、下…裏）  
東京大学考古学研究室蔵

全長	13.7cm
重量	16.4g

30. 波上洞穴遺跡

所在地 若狭一丁目

波之上宮が建立する琉球石灰岩丘陵の北端部は高さ約10mの断崖を形成し、崖下は東支那海の波に洗われている。遺跡はこの断崖の中腹に形成された洞穴内にある埋葬遺跡である。洞穴には崖が険しくて登れず、今回は調査できなかった。

1967年（昭和42年）に高宮廣衛氏らによって発掘調査が行なわれ、後期土器、貝製品、古銭、人骨などが出土している（註19）。人骨については小片保、森沢佐歳両氏による報告がある（註20）。



波上洞穴遺跡

### 31. 三重グスク

所在地 西三丁目

那覇港入口北岸の標高約7mの琉球石灰岩崖上に築かれたグスクである。北砲台と呼ばれ、南の屋良座森グスクとともに侵寇などを防禦撃退するために築かれた。築城年代は不明である。現在は第11管区海上保安本部那覇信号所となっているが、入口にはコンクリート製の鳥居が建てられ、奥側にはコンクリートで造られた祠があり、訪れる人が多い。



三重グスク 近景

### 32. 屋良座森グスク

所在地 住吉町

那覇港入口南岸にあり三重グスクと相對していた。那覇港入口を守るため1554年(天文23年高清28年)に築城された南の砲台であった。戦後、那覇港拡張のため、米軍によって破壊され、現在は存在しない。

### 33. 御物グスク

所在地 垣花町

那覇港内にある標高約8mの琉球石灰岩から成る小島に築かれたグスクで、現在は米国の軍事施設になっている。首里王府の公倉としての役割を持ったグスクで、もとはミキノグスク(看見城)といわれていた。創建年代は明らかでない。『琉球国旧記』に18世紀の初め頃にはすでに廃絶されていたことが記されている。

御物グスクの考古学的調査は沖縄県教育委員会が1977年に実施し、新田重清氏によって報告がなされている(註21)。調査の結果、青磁、青白磁、白磁、染付、天目、黒磁などの輸入陶磁器類が多量に出土することが確認された。



御物グスク 遠景(南側より)



御物グスク 近景（北側より）

#### 34. ガジャンピラ丘陵遺跡（洞穴も含む）

所在地 垣花町

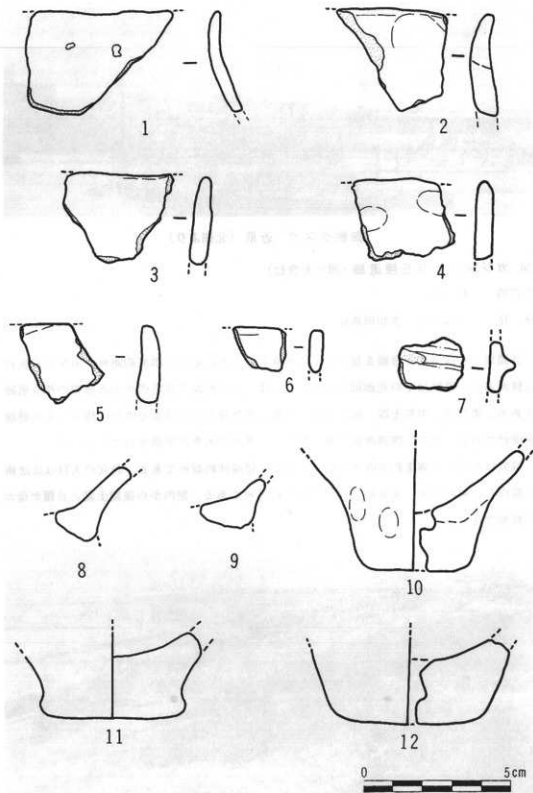
発見 1959年 多和田真淳

那覇港から国道331号線を越え左手に南東から北西に延びる標高約28m～34mの石灰岩丘陵がある。遺跡はその北西部の丘陵上に形成された沖縄貝塚時代中期と後期の複合遺跡である。遺物は、中期土器、後期土器、貝類、獣魚骨などが採集できた。採石により破壊を受けており、さらに国道改良工事に伴って遺跡の大半が破壊されてしまった。

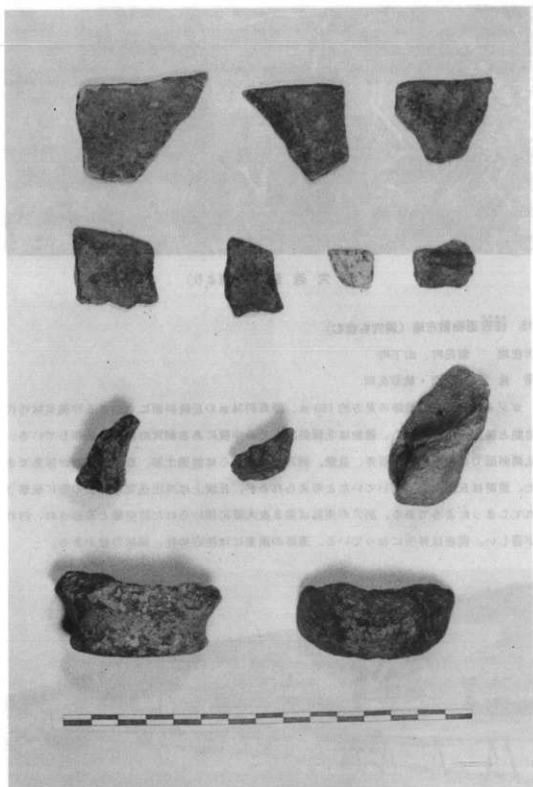
洞穴はここから南東約130mの地点にあり、標高は約42mである。洞穴の入口はほぼ南に開口し、幅約5m、高さ約1.5m、奥行き約3mである。洞内から後期土器と貝類が僅かに採集できた。



ガジャンピラ丘陵遺跡 近景（東側より）



ガジャンピラ丘陵遺跡 採集土器



ガジャンピラ丘陵遺跡採集土器



洞穴近景（南側より）

### 35. 住吉遺物散布地（洞穴も含む）

所在地 垣花町、山下町

発見 知念勇・桃原久明

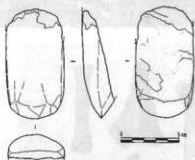
ガジャンピラ丘陵遺跡の東方約150m、標高約34mの丘陵斜面に立地する沖縄貝塚時代前期と後期の遺跡である。遺物は北側斜面とその中腹にある洞穴の前庭に散布している。北側斜面では後期土器、石斧、貝殻、洞穴の前庭からは前期土器、魚骨、貝殻が採集できた。遺跡は丘陵上まで続いていたと考えられるが、丘陵上は高圧送電線建設の際に破壊されてしまったようである。洞穴の奥側は第2次大戦に用いられた防空壕と連結され、汚れが著しい。現在は拝所になっている。遺跡の南東には住吉神社、湖城の嶽がある。



住吉遺物散布地 遠景（北側より）



住吉遺物散布地 洞穴



住吉遺物散布地採集石斧実測図

\*\*\*  
36. 山下町第 I 洞穴遺跡

所在地 山下町

発見 1962年 比嘉初子



奥武山球場の南側にはほぼ東西に延びる琉球石灰岩を基盤とする標高40mの丘陵がある。本遺跡は岡丘陵東端近くの北斜面中腹に形成された洞穴遺跡で、標高は約12mである。入口はほぼ南西に開口し、幅約1.5m、高さ約3m、奥行き約5mの小洞穴である。

1962年に文化財保護委員会(註22)、1968年に沖縄洪積世人類遺跡調査団(註23)によって発掘調査が行われている。調査の結果、洞穴内には3m以上にもおよぶ遺物の堆積層があることが確認された。堆積層は6層に分けられ、第Ⅰ層・歴史時代の堆積物、第Ⅱ層・陸産マイマイの層、第Ⅲ層・木炭層、第Ⅳ層・砂質の黄色土無遺物層、第Ⅴ層・木炭層、第Ⅵ層・暗褐色土鹿骨層となっている。

第Ⅴ層からは鹿の角や骨を加工した骨角製品が出土し、また、同層上部から「山下洞人」とよばれる8才くらいの少女の人骨も発見されている。第Ⅲ層から採集された木炭による



放射性炭素の測定は32,000 ± 1,000 y. B. P である。

沖縄における旧石器時代の代表的な遺跡として県の史跡に指定されている。



山下町出土鹿骨 東京大学古生物研究室蔵

### 37. トゥムイ古墓遺跡

所在地 字小禄

発見 1982年 那覇市教育委員会

遺跡はガジャンピラから山下町へ延びる標高約40mの丘陵東南端に位置する古墓である。墓は幅約4m、高さ約2mの琉球石灰岩の岩陰に2基作られている。いずれも天井近くまで石を積み上げたチヂフギ墓であるが、東側は一部石積が崩れている。この東側の墓内から土器片、古銭（栄寧通宝—1429～1440年—）が採集できた。





## お わ り に

今回の詳細分布調査によって38の埋蔵文化財が確認できた。これらの遺跡の大半が第二次世界大戦後の諸開発によって破壊された。現在、遺跡を取り巻く環境はきびしく、今後いかに保存し、活用するかが大きな課題である。

おわりにあたって遺跡の立地、現状、今後の課題について記述する。

本市の遺跡は大方琉球石灰岩の分布、露頭している地域、おもに天久、首里から識名一帯、小祿の一部に分布している。首里と識名一帯は市内で遺跡の半数近くが集中する地域である。旧那覇は遺跡の数は少ない。小祿では北側の石灰岩丘陵一帯に遺跡は分布している。

遺跡の立地を見てみると、旧石器時代の遺跡は石灰岩の洞穴に形成され、県指定の山下町第Ⅰ洞穴遺跡、嵩下原第Ⅰ洞穴、識名原遺跡A、識名原遺跡B、魚下原第Ⅰ洞穴、崎山遺跡、末吉町鹿化石出土地がある。

沖縄貝塚時代早期の遺跡は海岸砂丘地に立地するが、本市ではこれに相当する遺跡は未発見である。

前期の遺跡は貝塚を形成し石灰岩丘陵崖下に立地するが、中には石灰岩丘陵上に立地する遺跡もある。崎樋川貝塚A、天久貝塚、嵩下原貝塚は前者、城岳貝塚は後者である。

中期の遺跡には天久遺跡、山川貝塚、識名貝塚、識名園内遺跡があり、琉球石灰岩丘陵に立地している。

後期の遺跡は海岸砂丘に立地し、多量の貝殻が出土する。崎樋川貝塚Bがこれに相当する。

後期末頃にはガジャンビラ丘陵遺跡、住吉遺物散布地のように遺跡はおもに石灰岩丘陵に形成される。また、この時期の埋葬遺跡として波上洞穴遺跡がある。

グスク時代の遺跡はおもに石灰岩丘陵上や丘陵斜面に形成される。本市では天久グスク、首里城跡、シーマ御嶽遺跡、魚下原遺跡、カニマン御嶽遺物散布地など9ヶ所が確認された。

以上、遺跡の分布、立地について簡単に記述した。次に遺跡の現状を記述する。

前述のように今回の調査で38ヶ所の遺跡が確認されたが、保存状況の良い遺跡は極僅かで、ほとんどの遺跡は破壊されている。これを表にすると次のようになる。

時期 原因	旧石器時代			沖繩貝塚時代									グスク			不明・その他			計
				前期			中期			後期									
	□	△	×	□	△	×	□	△	×	□	△	×	□	△	×	□	△	×	
採石	2		4						2		1			1	1				11
宅地造成			2			2		1						1			1		7
学校建設													1					1	2
道路建設											1								1
公園建設						1										1			2
墓地造成														2					2
その他		1		2			1	1	1				2		1				9
計	2	1	6	2	0	3	1	0	4	1	2	0	3	4	2	1	1	1	34

※ □…一部破壊 △…大半が破壊 ×…壊滅状態

破壊の原因が2つ以上の場合別々に記入してある。

今回の調査の途中でガジャンピラ丘陵遺跡が国道331号の改良工事によってその大半が破壊された。同遺跡は国道建設予定地内に入っており、関係機関の間で協議した結果、昭和57年に緊急発掘調査を行うことになった。また、崎樋川貝塚では指定区域外で家屋建設のため一部が破壊された。両遺跡とも今回の分布調査で破壊されていることを発見した。このようにたえず遺跡は破壊の危機にさらされており、遺跡の周知徹底と積極的な活用を図る必要がある。

今後の課題として今回調査できなかった軍用地内の調査、窯跡の調査が残っている。

## 参 考 文 献

- 註1 島田貞彦 「琉球崎楯川貝塚」 歴史と地理 第30巻第5号 1932年(昭和7年)
- 註2 高宮廣衛 「那覇市の考古資料」 那覇市史 資料篇 第1巻1 1968年(昭和43年)
- 註3 三宅宗悦 「琉球崎楯川貝塚出土土犬に就て」 人類学雑誌 第47巻第10号 1932年  
(昭和7年)
- 註4 註2に同じ
- 註5 註2に同じ
- 註6 註2に同じ
- 註7 註2に同じ
- 註8 大川 清 「琉球古瓦調査抄報」 文化財要覧 1962年度版 1962年(昭和37年)
- 註9 註2に同じ
- 註10 多和田真淳 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」 文化財要覧 1956年度版 1956年  
(昭和31年)
- 註11 註2に同じ
- 註12 註2に同じ
- 註13 多和田真淳 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺」 文化財要覧 1960年度版 1960年  
(昭和35年)
- 註14 註2に同じ
- 註15 南方系、北方系石器の同時発掘 — 那覇市識名 — 琉球新報 1964年(昭和39年)10月16日
- 註16 註10に同じ
- 註17 小牧実繁 「那覇市外城嶽貝塚発掘報告」 人類学雑誌 第42巻第8号 1927年(昭和2年)
- 註18 金関丈夫 「沖縄県那覇市外城嶽貝塚より発見せる人類大腿骨に就いて」 人類学雑誌  
第44巻第6号 1929年(昭和4年)
- 註19 註2に同じ
- 註20 小片保・森沢佐歳 「波上洞穴出土人骨群について」 南島考古 2号 1971年(昭和46年)
- 註21 新田重清 「基地内文化財調査概要 — 御物城の考古学的知見 —」 沖縄県立博物館紀要  
第3号 1977年(昭和52年)
- 註22 註2に同じ
- 註23 渡辺直経 「沖縄における洪積世人類遺跡の調査」 南島考古 3号 1973年(昭和48年)

## 第V章 那覇市に関する文献目録

### 文 献

1. 加藤三吾 「沖縄の石器時代遺跡」  
東京人類学会雑誌 第188号 1901年(明治34年)
2. 鳥居龍蔵 「沖縄諸島に居住せし先住人民に就いて」  
東京人類学会雑誌 第227号 1905年(明治38年)
3. 小牧実繁 「那覇市外城嶽貝塚発掘報告」  
人類学雑誌 第42巻第8号 1927年(昭和2年)
4. 橋元増吉 「沖縄県那覇市外城嶽貝塚出土の明刀銭に就いて」  
史学 第7巻第1号 1928年(昭和3年)
5. 金岡丈夫 「沖縄県那覇市外城嶽貝塚より発見せる人類大腿骨に就いて」  
人類学雑誌 第44巻第6号 1929年(昭和4年)
6. 金岡丈夫 「琉球の旅」(十二)  
歴史と地理 第28巻第5号 1931年(昭和6年)
7. 金岡丈夫 「琉球の旅」(十三)  
歴史と地理 第28巻第6号 1931年(昭和6年)
8. 島田貞彦 「琉球崎樋川貝塚」  
歴史と地理 第30巻第5号 1932年(昭和7年)
9. 三宅宗悦 「琉球崎樋川貝塚出土家犬に就て」  
人類学雑誌 第47巻第10号 1932年(昭和7年)
10. 崎樋川貝塚出土石器土器(図録)  
考古図録 京都帝国大文学部陳列館 1935年(昭和10年)
11. 城岳貝塚出土明刀銭(写真)  
考古図編Ⅺ 東京帝国大文学部考古学研究室 1935年(昭和10年)
12. 伊東忠太・鎌倉芳太郎 「南海古陶器」  
宝雲舎 1937年(昭和12年)
13. 三宅宗悦 「南島の先史時代」  
人類学先史学講座 第16巻 雄山閣 1940年(昭和15年)
14. 八幡一郎 「琉球先史学に関する覚書 —考古学上より見た琉球—」  
民族学研究 15巻2号 日本民族学協会編集発行 1950年(昭和25年)

15. 外間正幸 「玉陵庭出土品発掘記」  
琉球1号 1955年(昭和30年)
16. 多和田真淳 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」  
文化財要覧 1956年度版 1956年(昭和31年)
17. 多和田真淳 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺」  
文化財要覧 1960年度版 1960年(昭和35年)
18. 多和田真淳 「琉球列島に於ける遺跡の土器、須恵器、磁器、瓦の時代区分」  
文化財要覧 1961年度版 1961年(昭和36年)
19. 大川 清 「琉球古瓦調査抄報」  
文化財要覧 1962年度版 1962年(昭和37年)
20. 多和田真淳・高宮廣衛 「那覇市山下町第Ⅰ洞(鹿化石)発掘報告」  
日本考古学協会昭和39年度大会研究発表要旨 1964年(昭和39年)
21. 高宮廣衛 「沖縄の旧石器文化」 歴史教育 第13巻第3号  
歴史教育研究会 日本書院 1965年(昭和40年)
22. 高宮廣衛 「沖縄県那覇市山下町第Ⅰ洞遺跡」  
日本考古学年報15 1967年(昭和42年)
23. 高宮廣衛 「那覇市の考古資料」  
那覇市史 資料篇 第1巻1 1968年(昭和43年)
24. 渡辺直経 「沖縄の洪積世人類をさぐる — 石灰洞穴から人骨が —」  
科学朝日 29巻5号 1969年(昭和44年)
25. 嵩元政秀 「沖縄県内出土の銭貨について」  
南島考古 創刊号 沖縄考古学会 1970年(昭和45年)
26. 「山下町第一洞人骨は3万年前のもの — カーボン測定で判明」  
南島考古だより 4号 1970年(昭和45年)
27. 渡辺直経 「沖縄における洪積世人類化石の新発見」  
人類科学 23号 1971年(昭和46年)
28. 小片保・森沢佐歳 「波上洞穴出土人骨群について」  
南島考古 2号 1971年(昭和46年)
29. 宮城篤正 「壹川窯出土陶片調査略述」  
琉球政府立博物館 館報4号 1971年(昭和46年)
30. 国分直一 「南島先史時代の研究」 慶友社 1972年(昭和47年)



31. たかしよいち 「沖縄の夜明け」〈日本発掘物語全集13〉  
国土社 1972年(昭和47年)
32. 国分直一・三島格 「沖縄主要遺跡におけるC<sub>14</sub>年代の検討」  
考古学ジャーナル 83号 1973年(昭和48年)
33. 高宮廣衛 「山下町第Ⅰ洞穴、伊江島具志原貝塚」  
日本古代遺跡便覧 1973年(昭和48年)
34. 渡辺直経 「沖縄における洪積世人類遺跡の調査」  
南島考古 3号 1973年(昭和48年)
35. 沖縄開発庁沖縄総合事務局 「文化財実態調査報告書」 1973年(昭和48年)
36. 沖縄県教育委員会 「第1回米軍基地文化財調査メモ」  
昭和49年度文化財要覧 1974年(昭和49年)
37. 多和田真淳 「沖縄の史跡・建造物」  
風土記社 1974年(昭和49年)
38. 高宮廣衛・金武正紀・鈴木正男 「那覇山下町洞穴発掘経過報告」  
人類学雑誌 83巻第2号 1975年(昭和50年)
39. 高宮廣衛・玉城盛勝・金武正紀 「山下町洞穴出土の人工遺物」  
人類学雑誌 83巻第2号 1975年(昭和50年)
40. 高宮廣衛 「第一章考古学」  
沖縄県史 5 文化1 1975年(昭和50年)
41. 三宅宗悦・三島格(解説) 「南島の石器聚成」—沖縄編—  
南島考古 4号 1975年(昭和50年)
42. 沖縄第四紀調査団・沖縄地学会編集 「沖縄の自然」 —その生いたちを訪ねて—  
平凡社 1975年(昭和50年)
43. 沖縄県教育委員会 「沖縄の文化財」 1975年(昭和50年)
44. 高宮廣衛・名嘉真宜勝 墓地「沖縄の墓地—主として亀甲墓について」  
社会思想社 1975年(昭和50年)
45. 特別展「多和田真淳氏所蔵考古資料」  
沖縄県立博物館 1976年(昭和51年)
46. 知念 勇 「山下町第Ⅰ洞穴遺跡」  
日本の旧石器文化 第3巻 雄山閣 1976年(昭和51年)
47. 沖縄県教育委員会 「沖縄県の遺跡分布」 1977年(昭和52年)

48. 新田重清 「基地内文化財調査概要—御物城の考古学的知見—」  
 沖縄県立博物館紀要 第3号 1977年(昭和52年)
49. 嵩元政秀 城「沖縄のグスク」  
 社会思想社 1977年(昭和52年)
50. 友寄英一郎編 「琉球考古学文献総目録・解題」  
 東出版 寧楽社 1977年(昭和52年)
51. 友寄英一郎 「琉球考古学文献目録」 1967. 1～1977. 11  
 南島考古 5号 1977年(昭和52年)
52. 沖縄考古学会編 「石器時代の沖縄」  
 新星図書 1978年(昭和53年)
53. 沖縄県教育委員会 「沖縄文化財調査報告」  
 那覇出版社 1978年(昭和53年)
54. 文化庁文化財保護部 「全国遺跡地図」 沖縄県 1979年(昭和54年)
55. 多和田真淳 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺(一)」  
 古稀記念多和田真淳選集 1980年(昭和55年)
56. 多和田真淳 「首里城の古銭と首里遷都」  
 古稀記念多和田真淳選集 1980年(昭和55年)
57. 藤本英夫・名嘉正八郎編 日本城郭大系 第1巻 北海道・沖縄  
 新人物往来社 1980年(昭和55年)
58. 渡辺直経 「沖縄における洪積世人類遺跡」 第四紀研究 第18巻第4号  
 日本第四紀学会 1980年(昭和55年)
59. 那覇市教育委員会 「那覇市の文化財」 1980年(昭和55年)
60. 沖縄県教育委員会 「第3回米軍基地内等文化財調査報告」  
 昭和55年度文化行政要覧 1981年(昭和56年)

## 新聞

園比屋武御岳復元工事の掘出し物 —礎石の下から黄金銭—

沖縄タイムス 1956年(昭和31年)3月19日

園比屋武御嶽出土の古銭 —高真王時代のものではない—(上・中・下) 東恩納寛悳

琉球新報 1956年(昭和31年)8月28日~30日

園比屋武御嶽出土の古銭 —高真時代のものに相違なし— 山里永吉

琉球新報 1956年(昭和31年)9月3~4日

再び園比屋武御嶽古銭について 東恩納寛悳

琉球新報 1956年(昭和31年)9月12日

二千年前の貝塚発見—小祿で— 沖縄タイムス 1959年(昭和34年)11月10日

知花城貝塚と首里城貝塚—茶の間の郷土史— 奥里将建

沖縄タイムス 1961年(昭和36年)3月13日~20日

宝口窯跡を発見—首里儀保町— 琉球新報 1961年(昭和36年)7月10日

二千年前のくぼみ石や奇石—那覇航空隊内で—

琉球新報 1962年(昭和36年)7月17日

鹿化石の出土の遺跡を発見—小祿で埋蔵のまま—

琉球新報 1962年(昭和36年)12月11日

那覇市内から鹿の化石—那覇市山下町—

沖縄タイムス 1962年(昭和36年)12月27日

細工された鹿化石—那覇市山下町— 琉球新報 1962年(昭和36年)12月29日

那覇の鹿化石の遺跡—確認された沖縄の旧石器時代—

琉球新報 1963年(昭和38年)1月27日

南方系, 北方系石器の同時発掘—那覇市識名—

琉球新報 1964年(昭和39年)10月16日

中国の古銭がワンサ—琉大文経ビルわき—

琉球新報 1965年(昭和40年)9月8日

首里城跡出土の古銭 大嶺薫 琉球新報 1965年(昭和40年)9月26日

首里城の古銭と首里遷都 多和田真淳

琉球新報 1965年(昭和40年)10月4日~8日

古い外耳土器が出土—那覇市天久御嶽門原貝塚

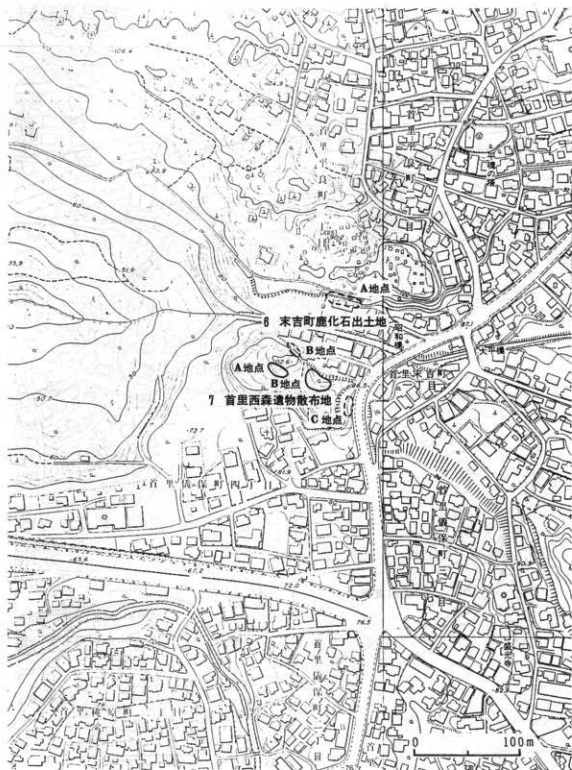
沖縄タイムス 1966年(昭和41年)9月28日

金の古銭発見 — 琉大構内で	沖縄タイムス	1966年(昭和41年)10月29日
古陶片について — 琉大構内から出土	山元恵一	
琉球大学学生新聞		1966年(昭和41年)12月3日
古銭がざくざく — 円覚寺跡から発見		
沖縄タイムス		1967年(昭和42年)2月2日
二千年前の貝塚発見 — 那覇市首里		
琉球新報, 沖縄タイムス		1967年(昭和42年)2月21日
二千年前の壺発見 — 那覇市波之上	琉球新報	1967年(昭和42年)4月8日
埋葬遺跡から無紋の古銭	那覇市波之上	
琉球新報		1967年(昭和42年)5月9日
平安時代の遺物? — 琉大構内から剣出土		
沖縄タイムス		1967年(昭和42年)5月17日
両刃の古剣を発見 — 首里城跡	琉球新報	1967年(昭和42年)5月17日
中国の古銭掘出す — 那覇市久米町	沖縄タイムス	1967年(昭和42年)5月27日
古銭がぞくぞく — 那覇市久米町	琉球新報	1967年(昭和42年)5月28日
御物城の発掘へ	那覇軍港内	
琉球新報		1968年(昭和43年)2月28日
中国の古銭見つかる — 那覇市識名 —	約1,300年前の通貨	
琉球新報		1968年(昭和43年)10月2日
古銭など多種発見 — 識名宮洞窟	沖縄タイムス	1968年(昭和43年)10月3日
旧石器人を研究	那覇と具志頭で発掘作業	
沖縄タイムス		1968年(昭和43年)12月29日
ぞくぞくと青磁片 — 那覇軍港内	琉球新報	1970年(昭和45年)5月22日
山下町第一洞穴は三万年前と判定	沖縄タイムス	1970年(昭和45年)5月31日
「湧田焼」ぞくぞく — 豊川	琉球新報	1970年(昭和45年)6月4日
豊川に窯の跡	沖縄タイムス	1970年(昭和45年)6月4日

## 第VI章 遺跡分布図



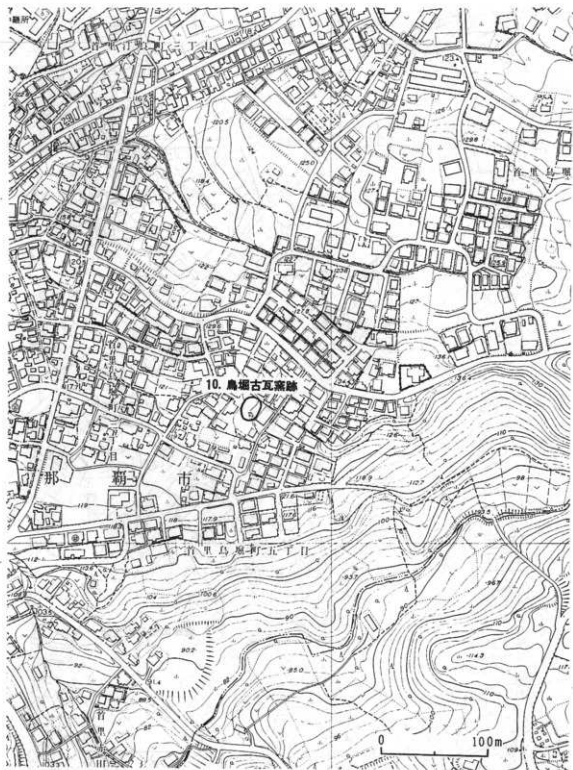


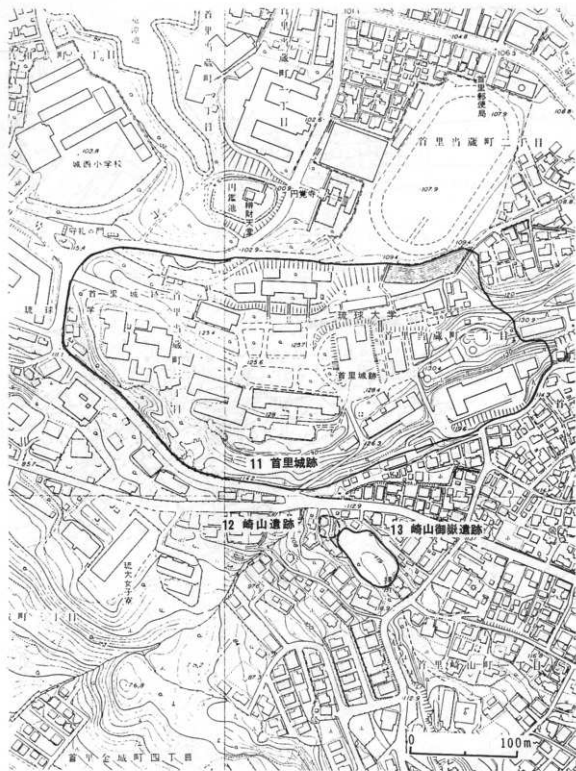




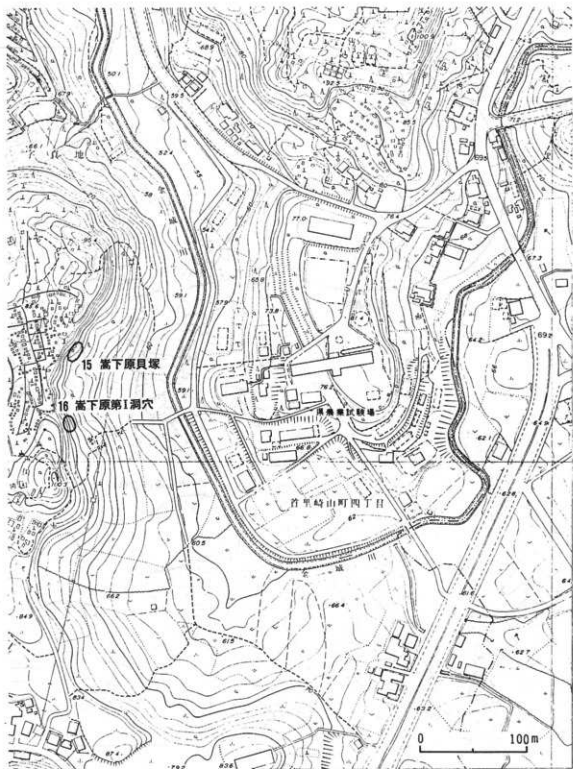


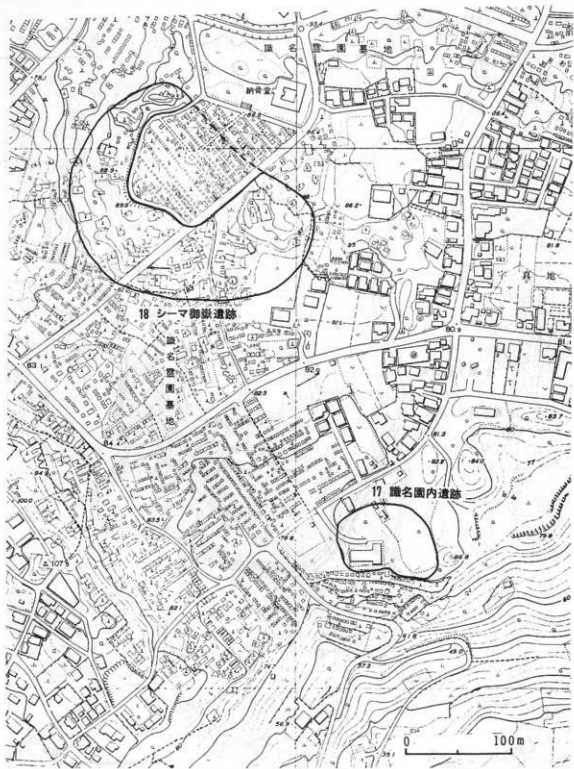


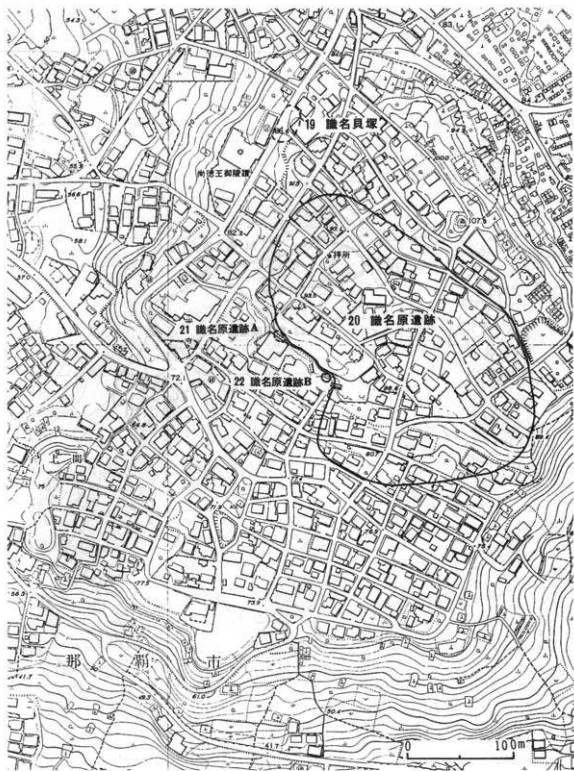




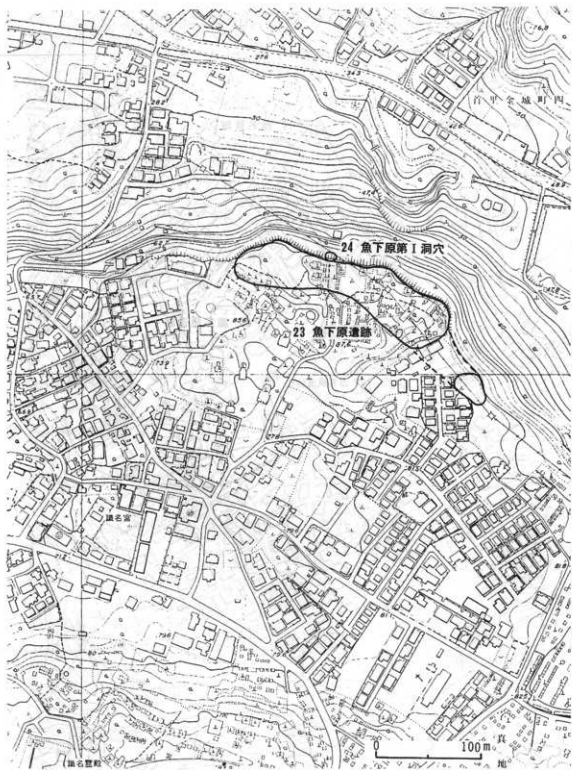










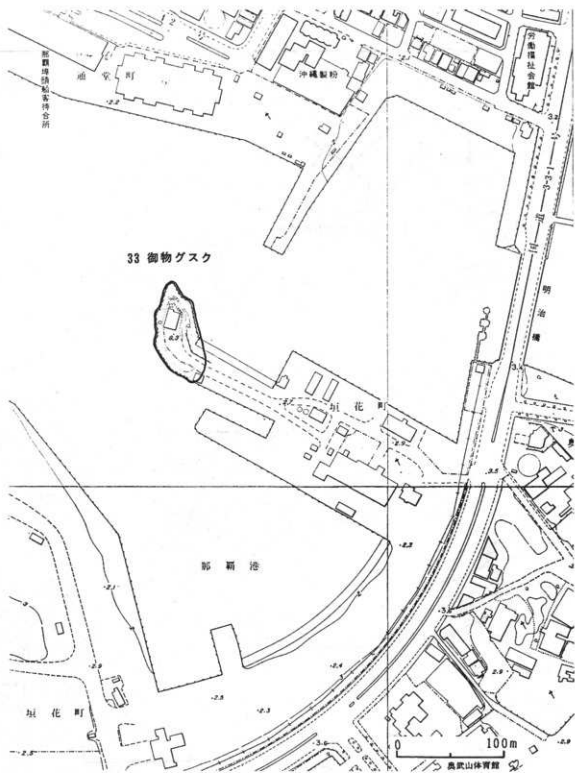


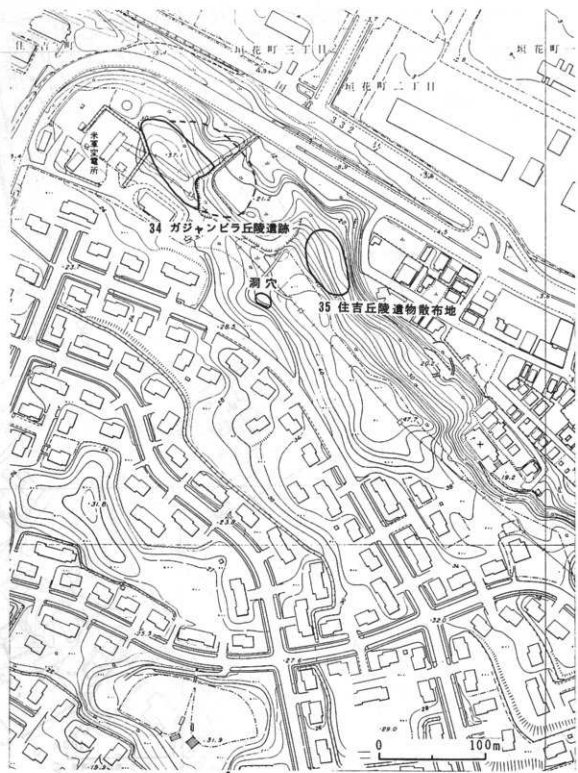


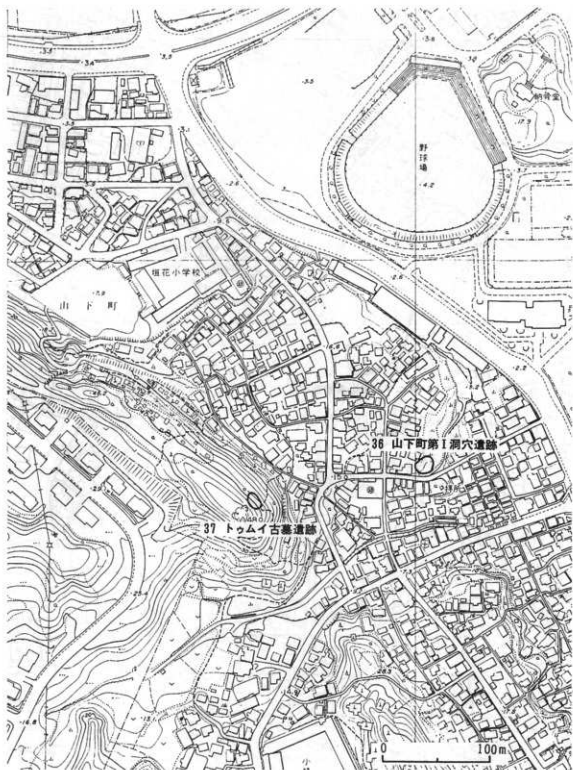
















那覇市文化財調査報告第4集

## 那 覇 市 の 遺 跡

発行 那覇市教育委員会

編集 那覇市教育委員会社会教育課

沖縄県那覇市樋川2-8-8

TEL 0988-32-4166

発行日 1982年3月

印刷 株式会社丸正印刷社

那覇市国場349-3

TEL 0988-54-8484